
Sの彼女、Mの彼氏

美咲 愛姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Sの彼女、Mの彼氏

【Zコード】

Z5932E

【作者名】

美咲 愛姫

【あらすじ】

ドジな瀬良純麗【セラスミン】、ドミな百瀬誠【モモセマコト】のラブストーリー。誠のことが気になる純麗……。純麗のことが好きな誠……。二人は無事結ばれることができるのか

プロローグ

「ねえ、いつもの買つてきてもうえる?」「はい、純麗さん。急いで買つてきます!」

私は、瀬良 純麗。

いたつて、普通の高校二年生。

ドSつ 気がある以外は……。

そして、今買い物に行つてくれた男は、百瀬 誠。

同じクラスのやつ。

誠は、ドMつ 気がある。

まあ……友達以上恋人未満つていうか……ある意味、主従関係なのかも。

第1話・複雑な関係

「純麗さん、はい」

「口上と笑い、買つてきた物を差し出す。

「ありがと」

そう言い、誠からミルクティーを受け取つた。
そして、ストローを袋から取り出し、ストローへと差し込んでいく。

ゴクン

喉を鳴らしながら、一口飲んだ。

「はい」

ストローが刺さった飲みかけのミルクティーを、誠へと差し出す。

「??」

誠は、これが何の意味なのか、わからないのかキョトンと不思議そうな顔をし、私を見てくる。

「は・い・！」

私は、意味を理解してない誠に少し腹が立ち、声を張り上げた。
すると、誠は身体をビクッと痙攣させ

「『めんなさい』と、か細い声を出し、ミルクティーを手に取る。
そして、可愛らしく両手で持ち、一口口クと飲み始めた。

「プハー」

そう一息つき、誠は

「美味しかったです、このミルクティー」と満面の笑みで言い、私に返してきた。

「当たり前でしょ？私が目つけたんだから」と冷たく言い放つ。
でも、それにも誠は愛想よく、私と接してくれる。

「そうですね！純麗さんが目つけるのは、どれもいいものばかり
です」

そういう誠に、たまにウツトツとしてしまつ自分がいる……。

「純麗ちゃん……？純麗ちゃん」

何故か、しきりに私の呼ぶ声が聞こえる。

「何か用？」

私は、気だるそうに問いかけた。

すると、誠は

「『めんなさい…』さつきから、呼んでも反応がなかつたので……」
とペロペロと頭を下げてくる。

「うふふ」

そんな誠を見ていたら、可愛くて笑みをもらしてしまつた。

「何かおかしいですか？！」

「うふふ」

誠をからかつて遊ぶのは楽しい。

「教えてくださいよー」と答えを求めてくる誠。

「そんなの自分で考えなさいよ」とからかう私。

そつこいしつづれつづれに、だんだんと誠の目に涙が溜まつてきた。

「ちょっと……ちょっと……。泣かないでよね…」

今にも泣きそうな誠に、動搖している自分がいる。

「ヒック、ヒック」

誠は泣きそうな顔で、私を見つめてきた。

仔犬みたいだ。

こんな顔で、見つめられでは私の理性が抑えきれない……。
ギューッ、と抱きしめてあげたくなる。

でも、そのようなことはしてはいけない。
誠には、他校の彼女がいるから

第2話・誠からの告白

よしよし と頭を撫でてあげた。

すると、誠は田尻をキュッと下げ、ニコッと微笑んでくる。
そして

「僕、純麗さんに可愛がつてもらえて幸せ者ですね」と呟いた。
「なーに言つてるの。誠には、彼女がいるでしょ？ そんなこと言つちゃ、失礼でしょ」と、釘を刺す。

「でも……」

誠は何か言ひたげな様子だ。

「何？ 誠は、彼女よりも私の方が好きだつたり？」

意地悪な私は、意地悪な質問をする。

「僕は……姫乃ちゃんより、純麗さんが好きかもしぬないです……」

耳を澄ませていなきや、聞こえないくらいの声だった。
しかし、私にははつきりと聞こえてしまつたのだ。

僕は……姫乃ちゃんより、純麗さんが好きかもしぬないです……。純麗さんが好きかもしぬないです……

何回も何回も、誠の言葉が頭の中で繰り返される。

一気に顔が赤くなるのが、自分でもわかる。

もしかして私……。

そう思つていると

「純麗さん、顔赤いですよ？ 大丈夫ですか？」と心配そうに、顔を覗きこんできた。

「あつ……うん……。全然大丈夫」

そう言い、私は席を立つた。

「純麗さん、どこ行くんですか。僕も行きます」と言い、私の後をチヨコチヨコとついてくる。

あー、もう。何でついてくるのよ……。

ムカムカはしてはいるものの、誠がいつまでもついてくれるのが嬉しい。

こんな気持ちになつたのは初めてだ。

それは、たぶんさつきの言葉のせいだろう。

「いつまでついてくる気?」

いつの間にか、靴箱の前までに来てしまつていた私。だけど、誠はついてきていた。

「僕は、ずっとついて行きますよ。まあ……今から純麗さんが早退するとか言うなら無理ですけど……」と俯きながら言つ。

今見る誠の姿は、とても男らしく見えた。

いつも私が見ている誠じゃない……。

「バツカじやないの? どこまでもついてくるとか不可能に決まつてるのに……」

私は、

現実は辛いもの何だ、なにもかもが漫画みたいにはいかない……といつ現実を憎んだ。

今にも涙が出そうだった。

すると、誠が私の近くへと歩み寄り、ソッと抱きしめた。

そして

「どうして、いつも純麗さんは強がるんですか?……? 僕が、頼りない男だからですか? それなら……僕……純麗さんを守れるような男になりますから」と抱きしめながら言つ。

この言葉は、今の私にとっては凄く嬉しかった。

だって……好きかもしれない誠に、告白もどきの言葉をもらつたから

ら

いつもは、人前で……もちろん誠にでさえ、涙を見せなかつた私だが、この時は涙を流してしまつた。

そのことに驚いたのか誠は、びついたらここのかとオロオロしてい
る様子。

「ほんことで……オロオロしてたんじゃ、私の彼氏になんか務ま
らないんだからっー」

いくら泣いているとしても、誠をいじめるだけは忘れない私。
何と言ひださだ……。

我ながら驚く。

「僕は、たしかに今はまだ頼りないかもしれないけど……絶対に頼
れる男になつてみせますから!」と、強気のようだ。

「もひ……そんなこと言つと本気にしちやうよ? 誠も困るんだか
ら、ほりこり」としないの」と言い、抱きしめている誠の手を剥が
そうとする。

でも、誠は力を込め、私を離そつとしない。

そして、私の肩を両手で掴み、向き合つ体勢となり

「僕は冗談なんかで言つてるわけじゃないんです。本気に純麗さん
のことが好きだし、純麗さんを守つてあげたいんです!」と告白し
た。

本気にしちゃダメ、本気にしちゃダメ。誠には、彼女がいるんだか
ら……。

そう自分に言い聞かせ、グッと堪えた。

誠は、返事を待つてゐるのか何も話してはくれない。
刻々と時間だけが過ぎていく……。

「ほり……ほめん!」

私は、その場にびくくなり、誠を残して走り去つていった。

第3話・誠の異変

「どうしよう……。どうしよう……。

逃げ出してしまったことに焦る私。
きっと、傷ついたよね……。

そう思いながらも、どうしていいかわからず、とりあえず教室へと戻つた。

教室

教室へと戻ると、誠の姿はなかつた。

まだ戻つてないんだ。戻つたら、わたくしのことを謝らなきや。

キーンコーンカーンコーン。

授業を告げるチャイムが鳴つた。

話していた生徒は、話すのを止め、ビニカに行つてたらしき生徒は、戻つてき、皆が席へとついた。

でも、一つだけポツカリと空いている席がある。

私の前の席……誠の席だ。

どうしたんだろ……。

そう思つていると、ガラツと扉が開く音がした。

誠かと思い、ハツとして扉のほうに手をやつたが先生だった。

「それでは、出席をとりまーす。相田さん」

「はい」

「井上くん」

「はいはーい!」

「尾田さん」

……、次々と名前が呼ばれていく。

「百瀬くん
シーン……。

「百瀬くん、あれいないわね。朝はいたのに……。瀬良さん、知
らない?」

いきなりの問いかけに、ビックリする私。

「えつ……。あつ、さつきまでは一緒にいましたけど、あとは……」

「あつ、そなんだ……。こいつも一緒に瀬良さんなら、わかると思
つたんだけど」

先生の言つた、いつも一緒、といつとこが、妙に辛く感じた。
私達つて、周りからはそう思われてたんだ……。

ガラツ

突然、扉が開かれ「すいません、ちょっとお腹痛くて」と、入つて
くる誠の姿。

チラッと見ると、トイレで泣いたのか、少し涙目になり、目が赤か
つた。

席につくなり、誠は机に顔を突つ伏した。

「ねえ、誠。さつきは、いきなり逃げ出しあやつて」「めんね?
「別に……」

ボソッと呟く誠は、明らかに様子が変だ。

でも、これ以上話していると先生に怒られそつなので、帰りに話す
ことにした。

第4話：久しぶりの再会

「それでは終わります。礼！」

「さよなら」

終礼が終わり、帰る人もいれば、掃除当番の人、部活の人もいる。

「誠、帰ろつか？」

いつもは、誠から来るのが様子がおかしかったので、私から誘つた。

まあ……いつも一緒に帰っているんだけど。

「もう僕にかまわないでください。純麗さんといふと辛いです」

そう私に言い残し、教室から出て行ってしまった。

「どうしたの、純麗？ 百瀬と喧嘩でもした？」 親友の小鳩 木の実が心配そうに、私の顔を覗きこんでくる。

「あっ、ううん！ そんなわけないじゃん？」

木の実を心配させまいと思い、つい嘘をついてしまった。

「そつかあ？ 何か……百瀬、いつもと雰囲気違つたよ？」

「ホンシトーに、全然大丈夫だから！」

いちいち、つつかかつてくる木の実に、少し苛立ちを感じながらも平然としているそぶりを見せる。

「うーん……」

木の実は、まだ何かつかかつてくるが、私が

「ねつ？ ねつ？」

と言つと

「まあ、いつか。純麗と百瀬の問題だしね。でも、何かあつたら遠慮なく相談してね」と心配してくれているようだ。

「ありがと」

私は、そう言い教室を後にした。

帰り道

今まで毎日誠と登下校は一緒にいた。

朝七時頃、誠が私の家まで迎えに来てくれて、帰りはやっぱり私の家まで送ってくれる。

いつの間にか、そのことが普通になっていたため、誠が隣にいないことが不快に思う。

「ああ……」

一人、溜め息を吐くと

「純麗～」

と、どこから聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「えつ……？　え～」

私は、驚いてしまった。

私の前に、立っている人物……。

それは……中学の時のクラスメート、谷村 裕優だったからだ。どれだけ必死に走ってきたのか、裕優の額には汗が浮かんでいる。そして、久しぶりに会った私に言つた一言は

「太つた？」

何この男～。無神経な奴。と、思いながらも、怒れない私。だって……中学の時、好きだった人なんだもん……。優しい……けど、たまにキツイことを言つ裕優が好きだった。だったと過去形にはしているが、今も好きなんだと思う……。だって、すぐドキドキしてるから……。

第5話・ユウコ……？

自分でも、顔が赤くなっているのがわかる。
すごく熱い。

「あれ？」もしかして、図星？」

私が、いつになつても答えないからか、当たつていると思つてしまつたらしい。

「太つてなんかないし！ むしろ、ボンッ・キュッ・ボンッに近づいてくるんだから！」と、ついむきになつてしまつた。ジーッ、と私に向けられる視線が痛い。
いくらか経つと、裕優の視線が私の顔へと移つた。
そして、ニコーン、と微笑んだ。

「何よ！ 気持ち悪い！」

私が、言葉を吐き捨てる

「何かわ……お前……。やつぱやめた」と、最後まで教えてくれない。

「何？ そんなにも私の身体、イケてなかつた……？」

少々不安氣味に問う。

すると、裕優は顔を赤らめ俯き

「いや。むしろ、その逆」と、ボソリと呟いた。

えつ……？ え――――――！

それつて……それつて、もしかしてのもしかして……。

私は、心中で叫び、そして……一人で色々と考えてしまつていた
今、私はどんな顔をしているんだね？。

恥ずかしがってる顔、ビックリしている顔、それとも……嬉しがってる顔？

今の私には、どれも当て嵌まる気がして、何だか恐い。

「いきなりごめんな……。ホントにごめん！」

何故だか、裕優が謝つてくる。

「えっ？ 裕優、何かあった？」

私がこういった理由は……いつも何があつても、絶対に謝らない裕優が謝つてきたからだ。

「別に何もないけど？」

そう答える裕優は、どこかおかしい気がした。

「何もないんだつたら、どうして謝るの？ ねえ！」

自分から謝ることは、社会的にはいいことなのに、何故か私は自分から謝つてくる裕優を責めていた。

そして……何故か涙が溢れだしている。

「えっ、何？ 何で純麗が泣いてるの？ 僕が、変なこと言つたから？」

泣いている私を心配してくれる裕優。

自分でも、何で泣いているのかわからない。

どうして私は泣いているんだろう……。

第6話・初めての彼氏

ヒック、ヒック、と泣き続ける私に裕優は困っている様子だ。

ギュッ

いきなり私を包み込むように、抱き寄せてくる裕優は少し震えている。

「純麗……。ホントに『ごめんな』？」

「ううん、大丈夫だから……」

そう言い、私は裕優の腕から抜け出す。

ホントは、ずっとこのままで居たかった。

だけど……そしたら自分がおかしくなってしまいそうで、自分から離れた。

私は、涙を拭い、顔を上げた。

裕優はどこか悲しい顔をしている。

「『ごめんね……。だけど……裕優に抱きしめられると、ホントおかしくなりそうで』」

「えつ？」

何故か、裕優は驚いている。

私、何か変なこと言っちゃった……？

急に不安がつのってきた。

「『ごめん。何か変な』こと言つた……？

恐る恐る聞いてみる。

すると、裕優はまたも驚き「えつ？」と言い、続けて「何か勘違いしてる？」と、付け加えてきた。

えつ？勘違い？

裕優には、勘違いと言われたが全然わからない。

「いや……。俺さ、てっきり純麗が嫌がってるのかと思つて」

「！」

私、そんなに嫌がるそぶりしてた？！

「ごめん、裕優。

心の中で謝った。

そして、今まで自分の心の中で秘めていた想いを、一気に打ち明けた。

「あのね、私……中学の時から裕優のことが好きだったの。高校に入つてからは、忘れようと思つて忘れたんだけど、今日会つて、またあの時の気持ちが戻つてきちゃつて……」

俯いていた顔を上げると、裕優の顔が赤かつた。

しばらくの沈黙の中、最初に口を開けたのは裕優だった。

「俺も……俺も、中学の時から好きだった。今も好き」

裕優の言葉で涙腺が緩んだのか泣き出してしまう私。

そんな私を裕優は優しく抱きしめてくれた。

私は、そんな裕優がすごく愛おしく思えて、ギューシ、と強く抱きしめた。

「裕優……私、今すぐ幸せ」

「俺も」

そう言葉を、交わしながら、私達は幸せのひとときを過ぐした。

「これ、俺のメアドとケー番ね！」

別れ際に、メアドとケー番が書かれた紙をもらい、私は落とさないようにと胸ポケットの中に入れた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5932e/>

Sの彼女、Mの彼氏

2010年10月28日08時43分発行